

**動的表現による写真の時間性に関する研究：**  
**筆者作品《In Between：見えるものと見えないものの境界》を中心に**

東京藝術大学大学院 美術研究科 先端芸術表現研究領域

学籍番号 13118925

呉在雄

Keyword：写真的なもの、光学的無意識、時間性、対象性、喚起性、アウラ、プンクトウム、停止、瞬間、記録、無意味

**論文要旨**

写真術の登場以降、写実的で客観的なイメージを作ることのできる写真は、個人のみならず、政治、社会、文化的な面でも急速に受容されるようになった。今日のデジタル技術の発展により、表現においても様々なメディアが融合して現れる。したがって写真メディアのパラダイムも変化を続けている。そのため写真的なもの（写真性）について研究の必要性を感じるようになった。本論文は写真的なものと本来の写真が持つ時間性に関する考察を通じて筆者の写真理論の基盤を作り、写真作品に適用するため研究を始める。写真で世界（対象）-カメラ - 人（撮影者、鑑賞者）の有機的關係によって表現する。つまり、このような写真の表現体系は、撮影だけでなく写真が時間性を獲得し、鑑賞者が写真を解釈（理解）することに影響を与えるからだ。そのため写真を写実的に見るのか、主観的な表現が可能なのか、概観的なイメージなのかという議論も写真の関係性によるものと見られる。したがって、筆者は写真で映像を作り、表現の材料になる光と映像を生成するカメラの光学的特徴と表現を通じて完成した写真映像が持つ意味を写真的なものとして規定し、考察を通じて明確にする。写真で時間性は撮影者とカメラによって獲得される。したがって、時間について哲学・科学・物理の時間について定義する。そして写真が持つ本来の時間性は瞬間、記録、停止で獲得されるとみて考察する。また、写真における時間性の表現は、構造（メカニズム）的にシャッター速度を調節して映像を生成する方法と、写真映像を構成して時間性を表現する方法の2つで見られる。したがって、シャッター速度による表現の開始と時間を表現する現代作家の作品を分析し、写真集やフォトシーケンス、フォトコラージュ、デジタル合成に現れる時間性について事例研究を進める。

本研究は動的表現で時間性を表現するために動きを視覚化して新しい表現方法を探して提示をしようとする。したがって、写真的なものとの時間性に関する考察により得られた結果を再現論理とし、動的写真を定義した。そして作品研究《In Between：見えるものと見えないものの境界》連作を通じて動きと停止に対するさまざまな再現方法を模索した。直線的な時間を表現するため、線と色で表現した〈Between the borders：同時の境界〉、瞬間の意味と見えないものに対する表現である〈Moment of persistence：持続の瞬間〉、現在性を強調するため、動きと停止を同時に表現した〈Moment and during：瞬間と間〉、光と時間を視覚化するために時間を圧縮して新しい視覚的経験を表現した〈Day and Night：昼と夜〉4つの作品から構成される。動的表現で写真の直接的な意味を最小化するために動きを強調することは、写真の美学的価値である喚起性（aura）を強調することになる。本

研究作品である〈同時の境界〉は写真媒体の持つ多様な側面の中で、時間性を積極的に表現することでデジタル環境への早い転換が行われる今、写真的なものへの定義とともに、非物質性の時間を視覚化することが表現の中心となる。カメラが存在する限り、写真的なものに対する多様な定義による表現研究が進められることを期待する。

審査委員

主査：佐藤時啓、東京藝術大学先端芸術表現科教授

副査：鈴木理策、東京藝術大学先端芸術表現科教授

副査：林卓行、東京芸術大学芸術学科教授

副査：菅沼比呂志、東京工芸大学・武蔵野美術大学非常勤講師